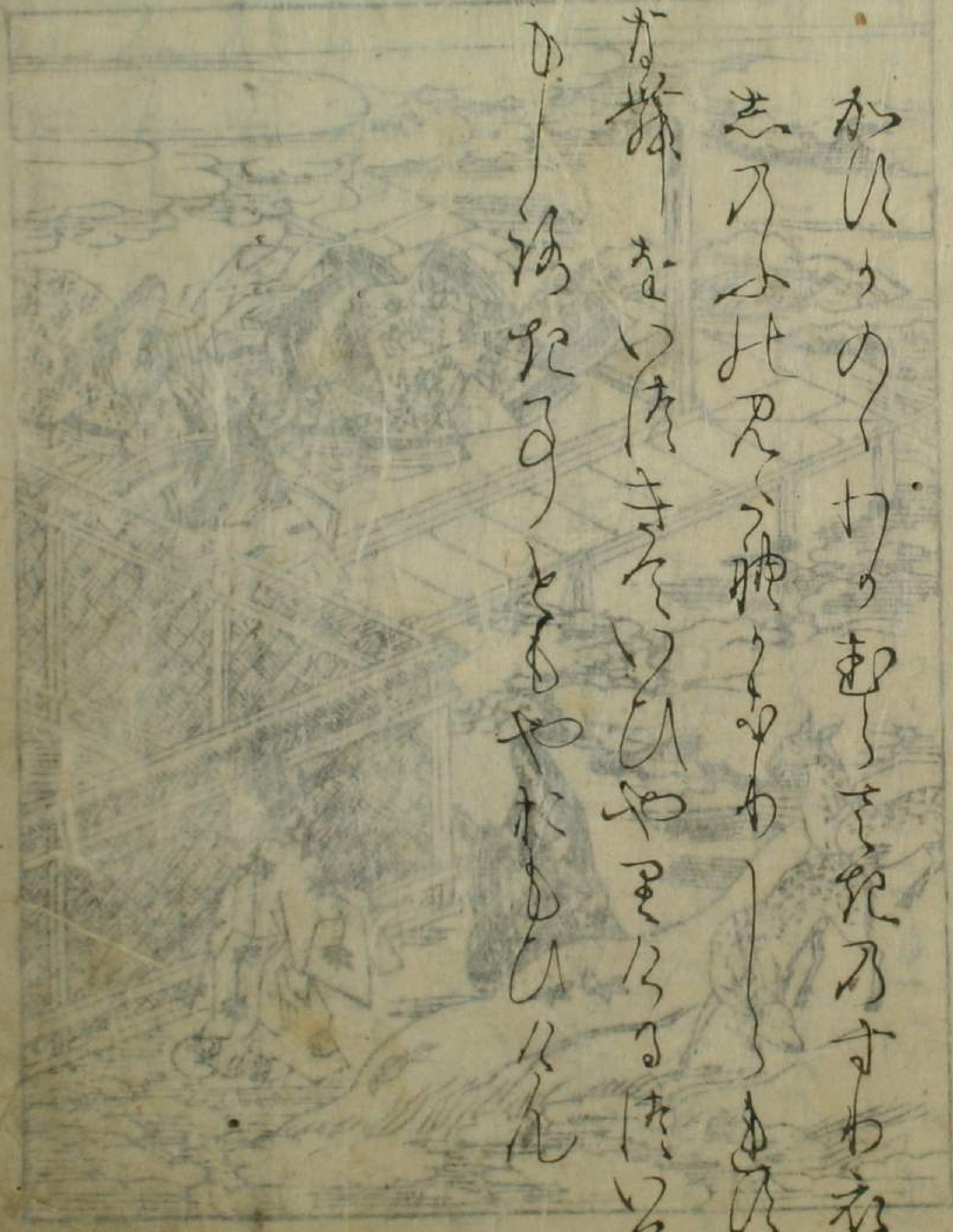
嵯峨板伊勢物語

へ利12
2278

明治四十一年五月二十日 執行弘道氏寄贈
へ 利 12 2378

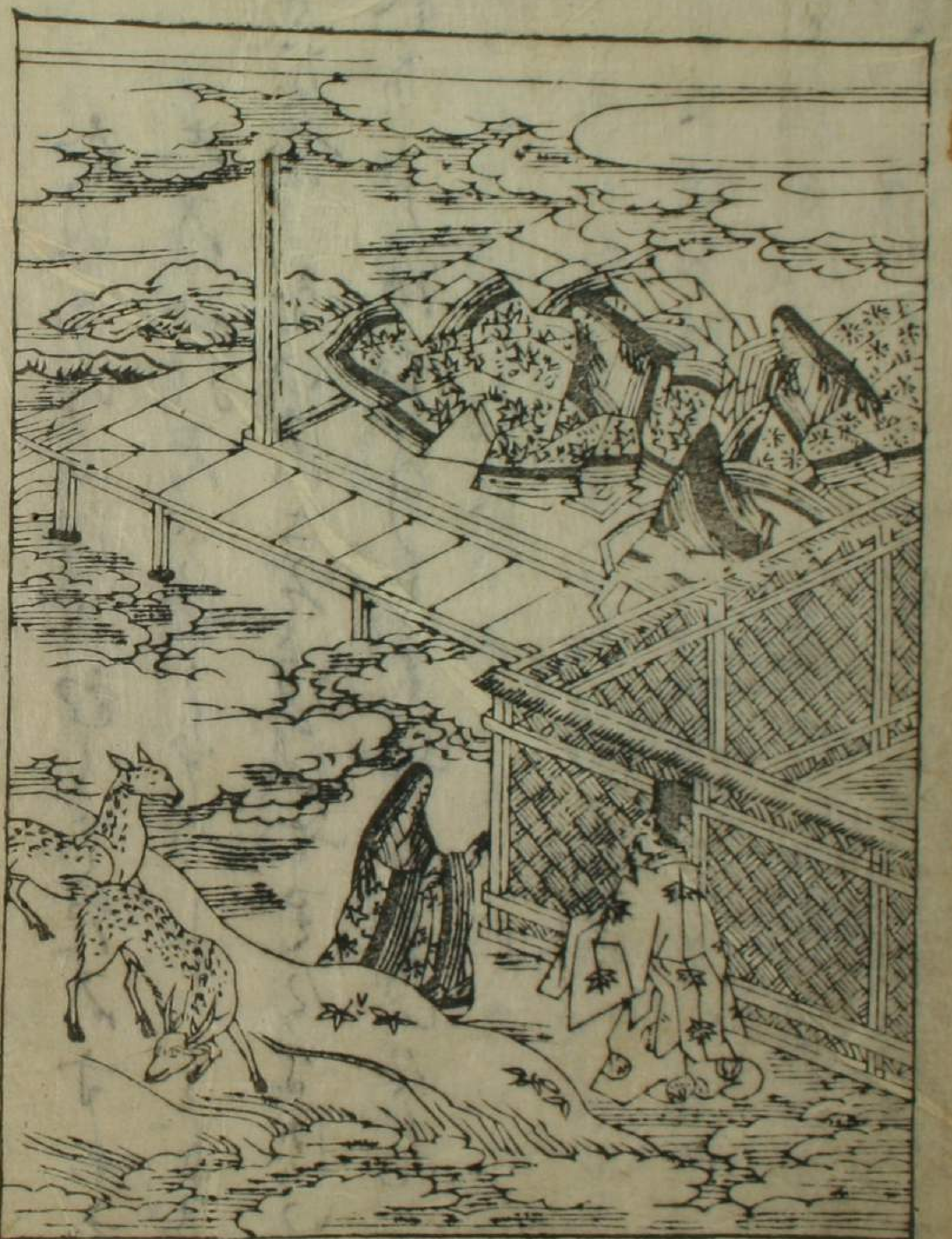
むかしおとこうゐかうぶりしてなら乃
京かすがの里にしるよしして狩に
いにけりその里にいとなまめいたる女
はらからすみけりこのおとこかいま見て
けりおもほえずふるさとにいとはした
なくてありければ心地まどひにけり
男のきたりける狩ぎぬのすそをきりて哥
をかきてやるそのおとこ志のぶ摺の
狩ぎぬをなむきたりける



かすがのゝわか紫乃すり衣
志のぶのみだれかぎりしられず
となむおいつきていひやりける
おもしろきことゝもや思ひけん

みちのくの忍ぶもちずりたれゆへに
みだれそめにしわれならなくに
といふうたの心ばへなり昔人ハかく
いちはやきみやびをなんしける

昔男ありけりならの京ハはなれ
此京ハ人の家またさだまらざり
ける時に西の京に女ありけり
女世人にハまされりけりその人
かたちよりは心なむまさりたりける



りけらしそれをかのまめおとこ
うちものかたらひてかへりきていかゝ
おもひけん時はやよひのついたち雨そほ
ふるにやりける

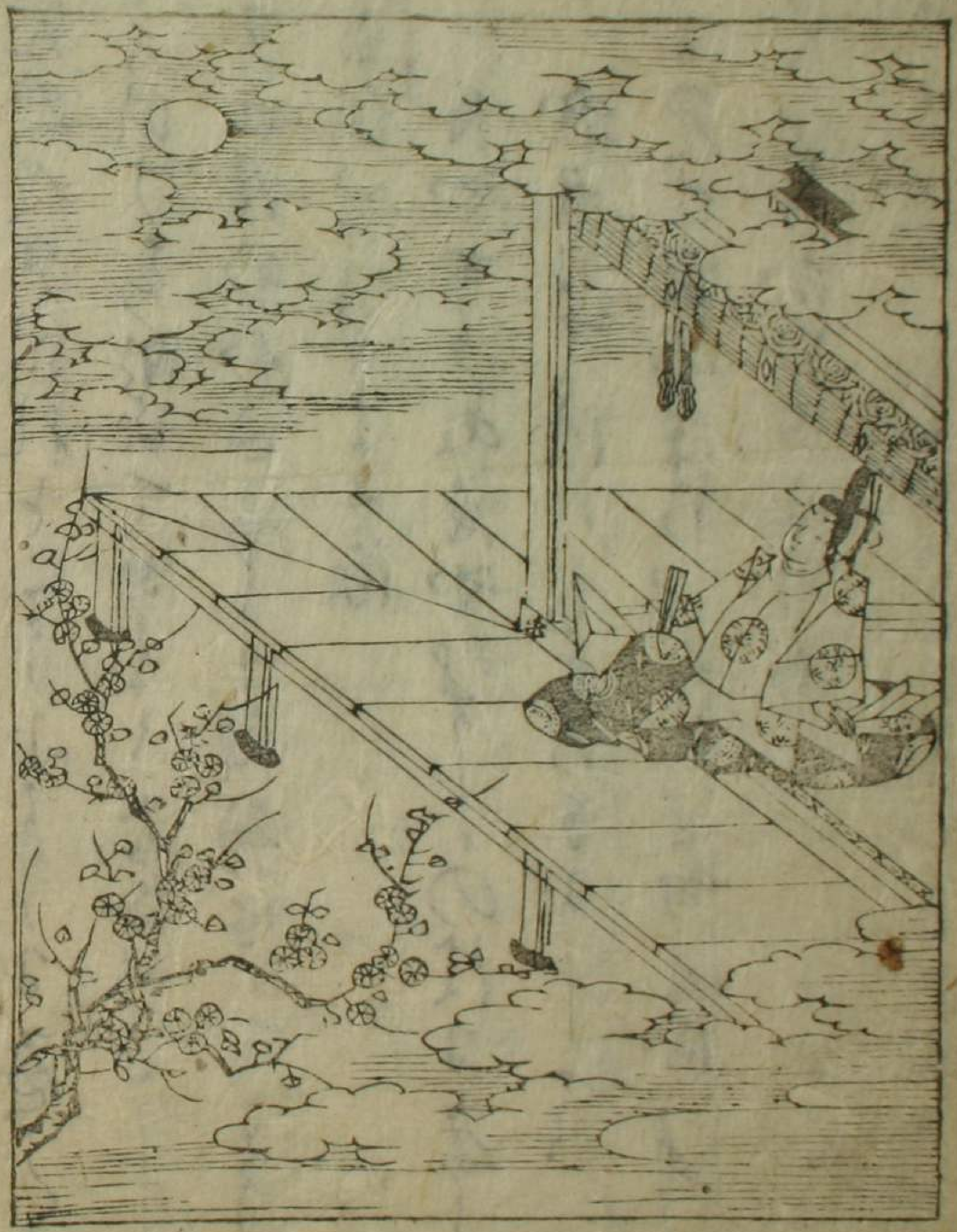
おきもせすねもせてよるをあかしては
春のものとてなかめくらしつ

むかしおとこありけりけさうしける女
のもとにひしきもといふ物をやるとて
　思ひあらはむくらの宿にねもしなん
ひしきものにはそてをしつゝも
二条のきさきのまたみかとにもつかうまつり
たまはてたゝ人にておはしましける
ときのことなり

むかし東の五条に　おほきさいの宮お
はしましける西の対にすむ人あり
けりそれをほいにはあらて心さしふか
かりける人ゆきとふらひけるを正月の
十日はかりのほとにほかにかくれにけり
ありところはきけと人のいきかよふへき所
にもあらさりけれはなをうしとおもひ
つゝなんありけるまたのとしの正月に梅の
花さかりにこそをこひていきて

て見ゐて見れとこそににるへくも
あらすうちなきてあはらなるいたしきに
月のかたふくまてふせりてこそを
おもひいてゝよめる
　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
　我身ひとつはもとの身にして
とよみて夜のほのほのとあくるに
なくなくかへりにけり

昔をとこありけりひんかしの五条わ
たりにいとしのひていきけりみそかなる
ところなれはかとよりもえいらてわらは
へのふみあけたるついひちのくつれよりかよ
ひけり人しけくもあらねとたひかさ
なりけれはあるしきゝつけてそのかよひ
ちに夜ことに人をすへてまもらせけれは
いけともえあはてかへりけりさてよめる
人しれぬわかかよひちのせきもりは



よしくこそはうらもねなこん
此まゝわかの身は川といたうこゝろやこけ
里はあまりゆるしてのわか二条にきさきたまよ
し乃ひてまいりわの后は世乃きこしあり
の神は都うとなちのまもらせたまひけ
流とう

昔おとこありけり女のえうましかりけるを
かりけるを年をへてよはひわたりけるを
をからうしてぬすみ出ていとくらきにきけり
けりあくたかはといふかはをゐていきけれは
のくさのうへにおきたりける露をかれ
はなにそとなんおとこにとひけり
ゆくさきおほく夜もふけにけれは鬼ある所
ともしらてかみさへいといみしうなり
雨もいたうふりけれはあはらなるくらに

女をはおくにおしいれておとこゆみや
なくひをおひてとくちにをりはや夜
もあけなんとおもひつゝゐたりけるに
おにはやひとくちにくひてけりあなやと
いひけれと神なるさはきにえきかさりけり
やうやう夜もあけゆくにみれはゐ
てこし女もなしあしすりをしてな
けともかひなし
志らたまかなにそと人のとひしとき

源氏うへてきえふ南しも丸ま
こ神八幡のおもきまれいやこの女房の情
むらに情かうまつ御やうつて為給つわけ
御まうたちのいくめてたくおもき志れ神ハ
ぬ守見てれひていゝてふわ久御を請おもう
と思わかはのおゆゝた経うく有つ孫の
大納言殿と下らうまて内へまいり給ふ子
いみしう御くひとあるをきてつけてとゝ
めてゝわか御したまうてありうれ給かく

おにとハいふものけわ殿といふおわかうて
おもきまれさて有おつしみ給ひと源氏や

むかし男ありけり京にありわひて
あつまにいきけるにいせおはりのあはひ
のうみつらをゆくになみのいとしろくた
つを見て

いとゝしくすきゆくかたのこひしきに
うらやましくもかへるなみかな

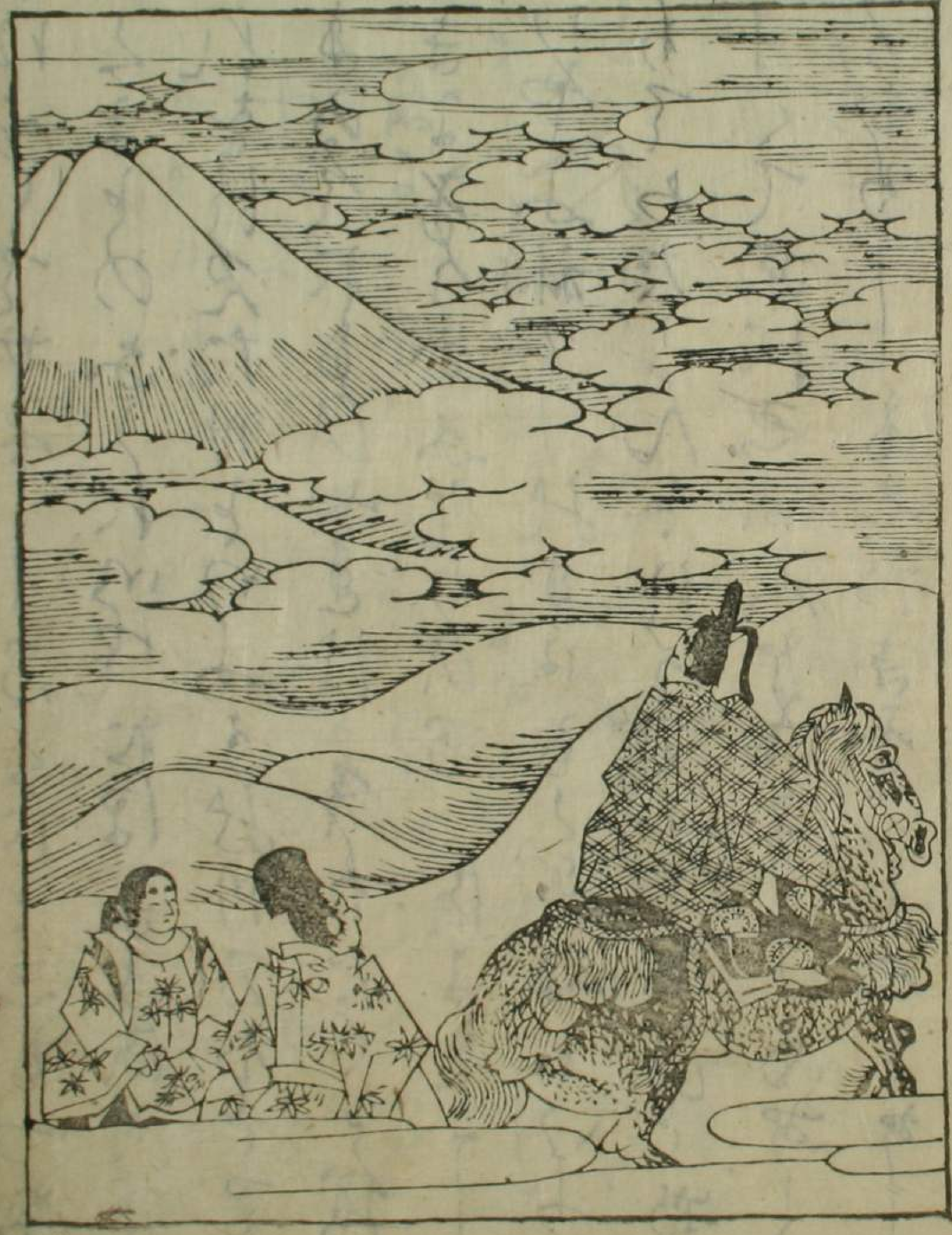
となんよめりける

昔をとこありけり京やすみうかりけん
あづまの方にゆきてすみ所もとむとて
ともとする人ひとりふたりしてゆきけり
しなのゝくにあさまのたけにけふり
のたつを見て
しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人の見やはとがめぬ

昔男ありけりその男身をえうなき物に思ひ
なして京にはあらしあつまの方にすむへき
国もとめにとてゆきけりもとより
ともとする人ひとりふたりしていきけり
みちしれる人もなくてまとひいきけり
三河のくに八はしといふ所にいたり
ぬそこを八はしといひけるは水ゆく
河のくもてなれははしを八つわたせるにより
てなむ八はしといひけるそのさはの

とかみ本院のけにおかのえうきてうひくひ
宰相みさいはかきたえたりとおもし給
くさたまかられを見ておかの人のいたくう
きけいたといふいつわり袋くの見にす
房てまひのいをよめといひけれはこよめる
かくて衣きけてあれはつまきあはきに
えあしくきぬなさひ物し拂思ふ
ひとあかりけたこれ人かきいひのうへに
像おもしれてねとひ有り宰相

ゆきてするかのくにゝいたりぬ宇津乃
山にいたりてわか入らんとする道は
いとくらうほそきにつたかえてはしけり
心ほそくすゝろなるめを見ることゝ思ふ
に修行者あひたりかゝるみちはいかてかいま
するといふをみれは見し人なりけり京
にその人の御もとにとて文かきてつく
するかなるうつ乃山辺のうつゝにも
夢にも人にあはぬなりけり

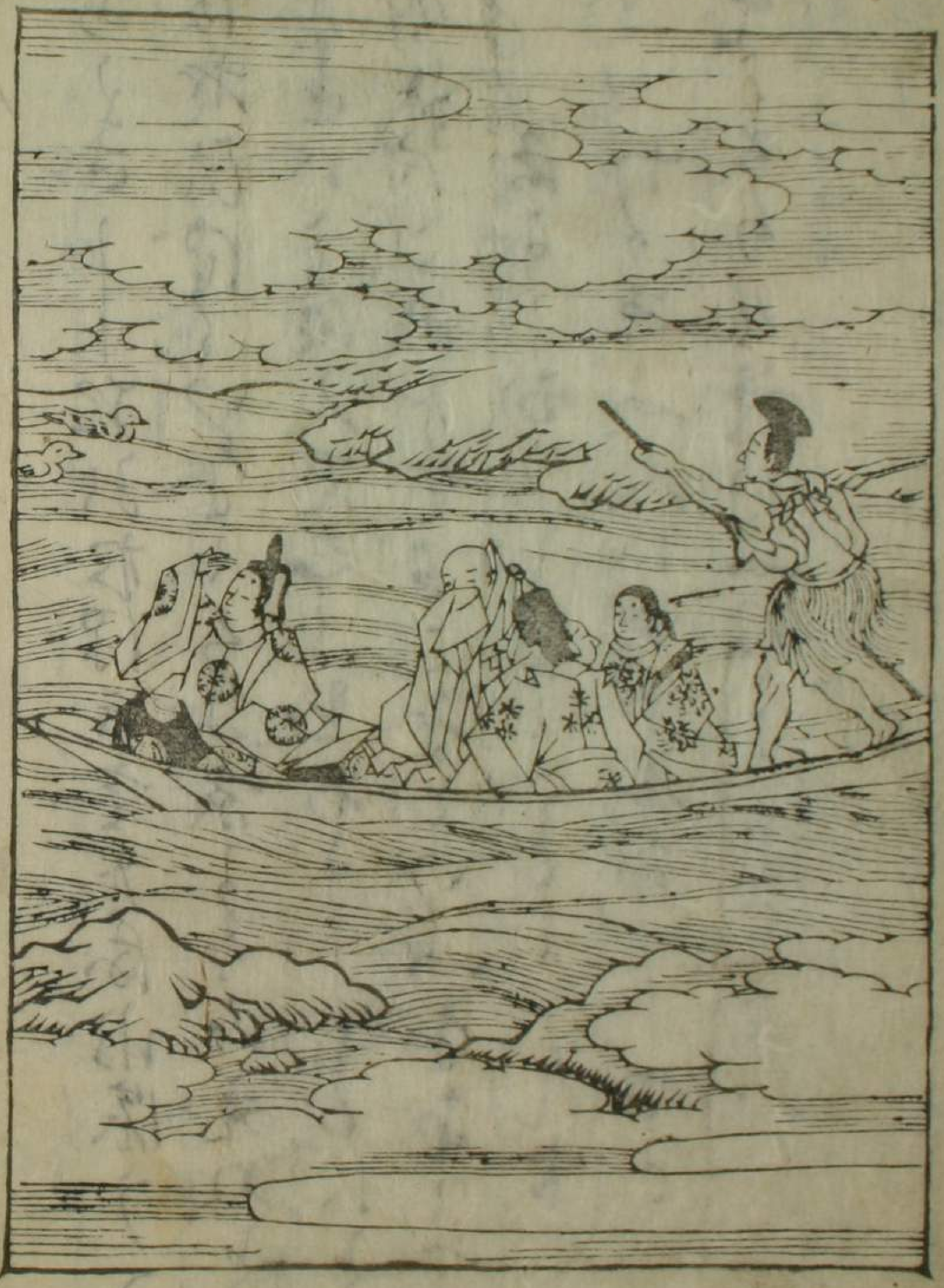


ふしの山をみれはさ月のつこもりに
雪いとしろうふれり
ときしらぬ山はふしのねいつとてか
かのこまたらに雪のふるらん
その山はこゝにたとへはひえのやまを
はたちはかりかさねあけたらんほとしてなりは
しほしりのやうになんありける

猶ゆき〱てむさしのくにと志もつふさ
のくにとのなかにいとおほきなる河あり
それをすみた川といふその川のほとりに
むれゐておもひやれはかきりなくとをく
もきにけるかなとわひあへるにわたしも
りはやふねにのれ日もくれぬといふにの
りてわたらんとするにみな人ものわひし
くて京に思ふ人なきにしもあらす
さるおりしもしろきとりのはしとあしと

あかき志きのおほきさなる水のうへにあ
そひつゝいをゝくふ京にはみえぬとりな
れはみな人見しらすわたしもりにとひけ
れはこれなん都鳥といふをきゝて
名にしおはゝいさことゝはん宮こ鳥
わか思ふ人はありやなしやと
とよめりけれは舟こそりてなきにけり

昔おとこむさし國まてまとひありき
けりさてその國にある女をよはひけり
ちゝはこと人にあはせむといひけるを
はゝなんあてなる人に心つけたりける
ちゝはなを人にてはゝなむふちはらなり
けるさてなむあてなる人にとおもひ
けるこのむこかねによみてをこせたり
けるすむ所なむいるまのこほりみよし
のゝさとなりける

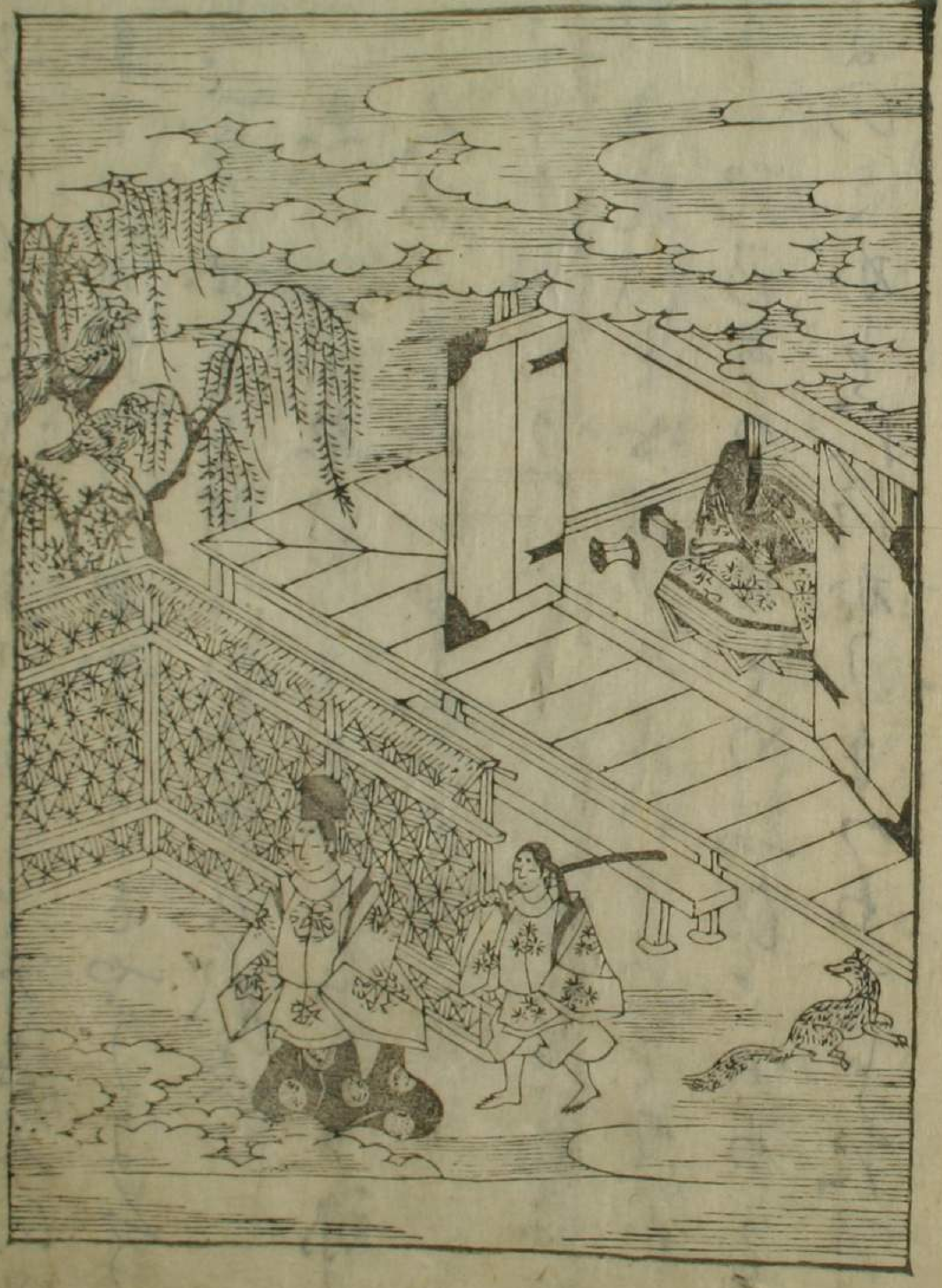


みよしのゝたのむ乃かりもひたふるに
君かかたにそよるとなくなる
むこかねかへし
我かたによると鳴なるみよしの
たのむ乃かりをいつかわすれん
となむ人の国にても猶かゝる事
なんやまさりける
むかしおとこあつまへゆきけるに友たち
ともにみちよりいひおこせける

わするなよほとは雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて
昔おとこありけり人乃むすめをぬすみて
むさし野へゐてゆくほとにぬす人なりけ
れは国のかみにからめられにけり
女をはくさむらの中にをきてにけ
にけりみちくる人この野はぬす人あ
なりとて火つけんとす女わひて
むさし野はけふはなやきそわかくさの

つまもこもれりわれもこもれり
とよみけるをききて女をはとりてともに
ゐていにけり

昔むさしなるおとこ京なる女のもとに
きこゆれははつかしきこえねはくるしと
かきてうはかきにむさしあふみとかきて
をこせてのちをともせすなりにけれは京
よりをんな
むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし
とあるを見てなんたへかたき心ちしける
とへはいふとはねはうらむむさしあふみ
かゝるおりにや人はしぬらん
昔男みちのくにゝすゝろにゆき
いたりにけりそこなる女京の人はめつら
かにやおほえけんせちにおもへる心
なんありけるさてかの女
なかなかに恋にしなすはくわこにそ
なるへかりける玉のをはかり
うたさへそひなひたりけるさすかにあ
はれとやおもひけんいきてねにけり夜ふ



かくいてにけれは女

夜も明けはきつにはめなてくたかけの
まだきになきてせなをやりつる

といへるに男京へなむまかるとて

くりはらのあねはの松の人ならは
宮このつとにいさといはましを

といへりけれはよろこほひて思ひけらし
とそいひをりける

若みとりにてふてうらとなき人のめ
まかまひの新有あやしうさやうまて
程へ余り女ともあしれみえのれた
志乃ふ山思ひてうふこちもの那
人のこころのおくも見所つなし
女うとかわ御くみてたし と思へとはなさ
り那きえひを心残みてえいのてはとせい
せりし记乃あわつ孫といつひとあわのり
みよのこかとに流かりまろわてとた有

あひ乃新とのちい世かえ乃時う一かあり
乃れたよみつ女の人乃ことも阿しれ人かう
き心う流ましくあてはすなみこと我こ
のみてことり人まもにも毒志く庵ても
なをせりしよかりし時のいまかしよの
つよのこやも志りすやしころあひた新
な流めやなく とこえなきてつぬ有
あまりふかてあまのきれまてなわな流
所へ川をおとく梅しとてりむ流まし

きすこうふうりん秋今はとゆく秋にやも
あふせと思ふをはましし人秋にたわ
まもふかわりわむもひてひて秋人に行
てりあひわひりひ人もとたら乃もとに
かうく時まえとて雨うりをなりこと
も行きにかなることもえ[?]て浅うはすこ
としかきれおくに

了秋おもておひみちとをのうふまま
秋おとうひはくよはへ有りわ

なのともやちこまかんてしほとあなると
せ月てしけのもれまほをかわでしめる
年さまもと秋とてうけりくまひかれを
いくなひきをたのみあぬ雁ん
かくつひやわれ達へ

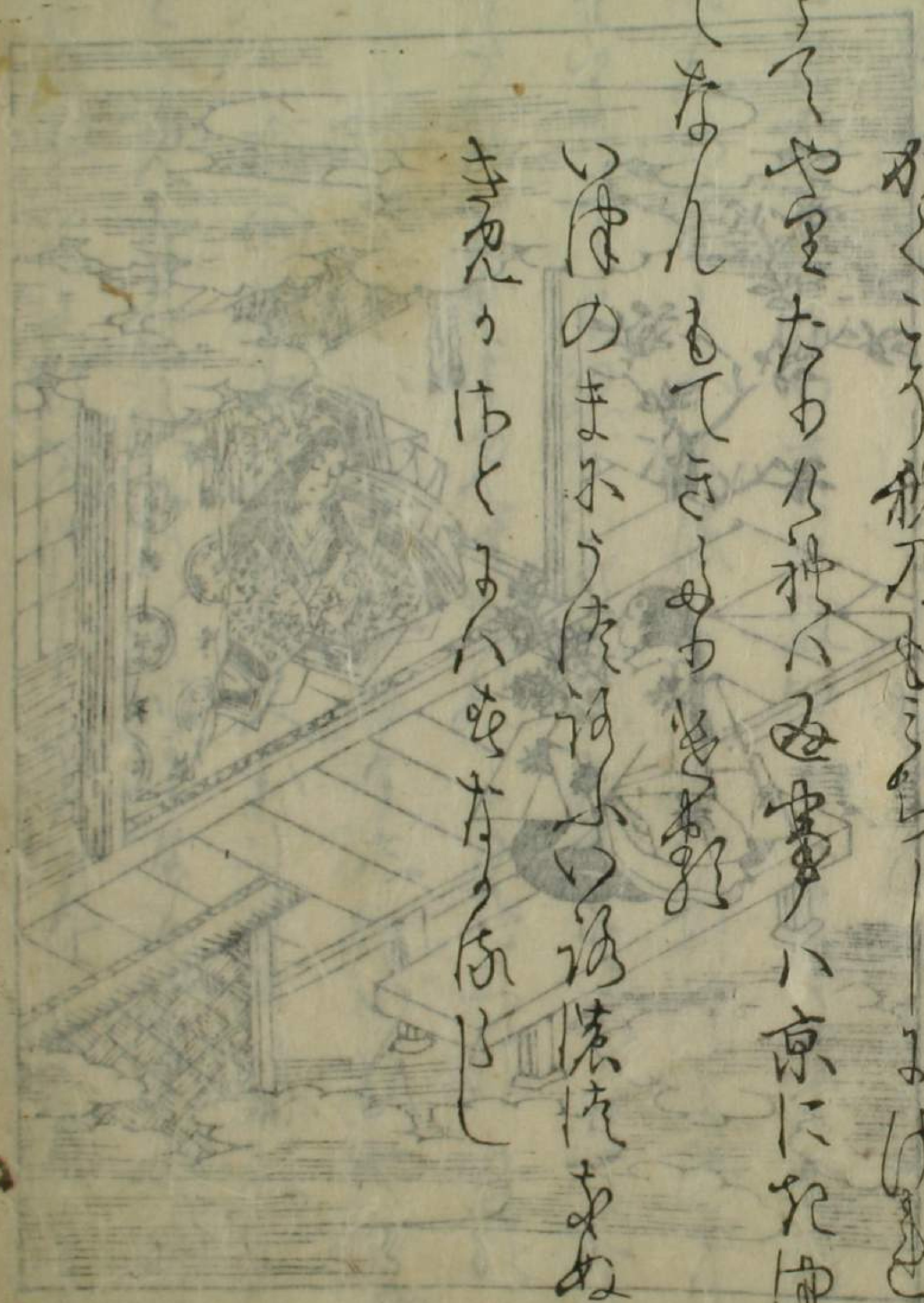
こ秋[?]にあまれ之衣むなしこう
見ゆのみ[?]しとたちまつわれ秋
よろこひてしたつてみ
秋やくらつ遊やまなみとおもふまで

あるはなきなきのありとあるかの歎
中しき給ふとはきさらぬ人はさく〳〵
の心かわか身をたのみてきたなの秋はいつる
あさなあさとみにこゝろあはれさく〳〵を歎
としよまきたる人もまちのかわ
ぬし
のゝこ寸八あまた光をとらなかの海し
きえの光あかとものみえとも見えましや
むかしな海に給ふ女あかの月男たちかくらむ

むかし女うたよむ月となかの秋はいとゝ詠
見んとて北との窓のうちはらへ出けれは
里てあはれとの心へ寄る
くるまなかにまほふはいつる西雲流
えたもとをゐてあらむとも見ゆ
わか事をしのはよそにまたれの歎
秋月にほふかう人のしる菊は
おかれたる人のうへのみかゝみ哉

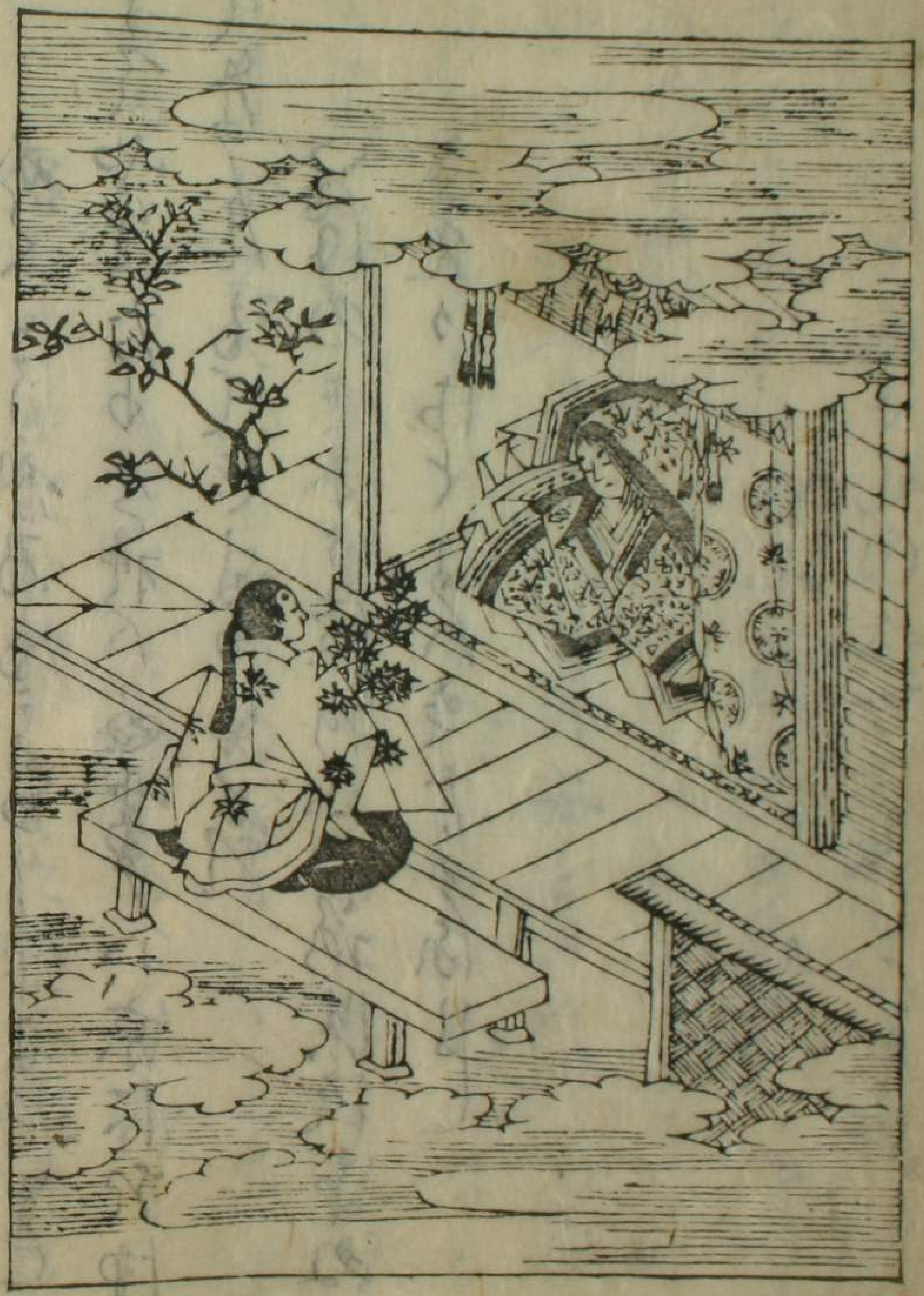
むかし男宮つかへしける女のかたに
こたちなりける人をあひしりたりける
ほともなくかれにけりおなし所なれは女
のめにはみゆるものから男はあるもの
かともおもひたらす女
あまくものよそにも人のなりゆくか
さすかにめにはみゆるものから
とよめりけれは男返し
あま雲のよそにのみしてふることは

わかゐる山のかせはやみなり
とよめりけるは又男ある人となん
いひける
昔男やまとにある女を見てよはひて
あひにけりさてほとへて宮仕へする人
なりけれはかへりくる道にやよひのは
かりにかえてのもみちのいとおもしろきを
おりて女のもとに道よりいひやる
君かためたおれる枝は春なから



かくこそ秋のもみちしにけれ
とてやりたりけれは返事は京にきつき
てなんもてきたりける
いつのまにうつろふ色のつきぬらん
君か里には春なかるらし

昔男女いとかしこく思ひかはしてこと
心なかりけりされといかなる事かあり
けんいさゝかなる事につけてよのなか
をうしと思ていてゝいなんと思てかゝる
哥をなんよみて物にかきつけゝる
　いてゝいなは心かるしといひやせん
　世のありさまを人はしらねは
とよみおきていてゝいにけりこの女かく
かきおきたるをけしう心をくへき事も



おほえぬを何によりてかゝらんと
いといたうなきていつかたにもとめゆ
かんとかとにいてゝとみかう見けれと
いつこをはかりともおほえさりけれハ
かへりいりて

おもふかひなき世なりけりとし月を
あたにちきりてわれやすまひし
といひてなかめをり
人ハいさおもひやすらんたまかつら
おもかけにのみいとゝみえつゝ
この女いとひさしくありてねむしわひて
にやありけんいひおこせたる

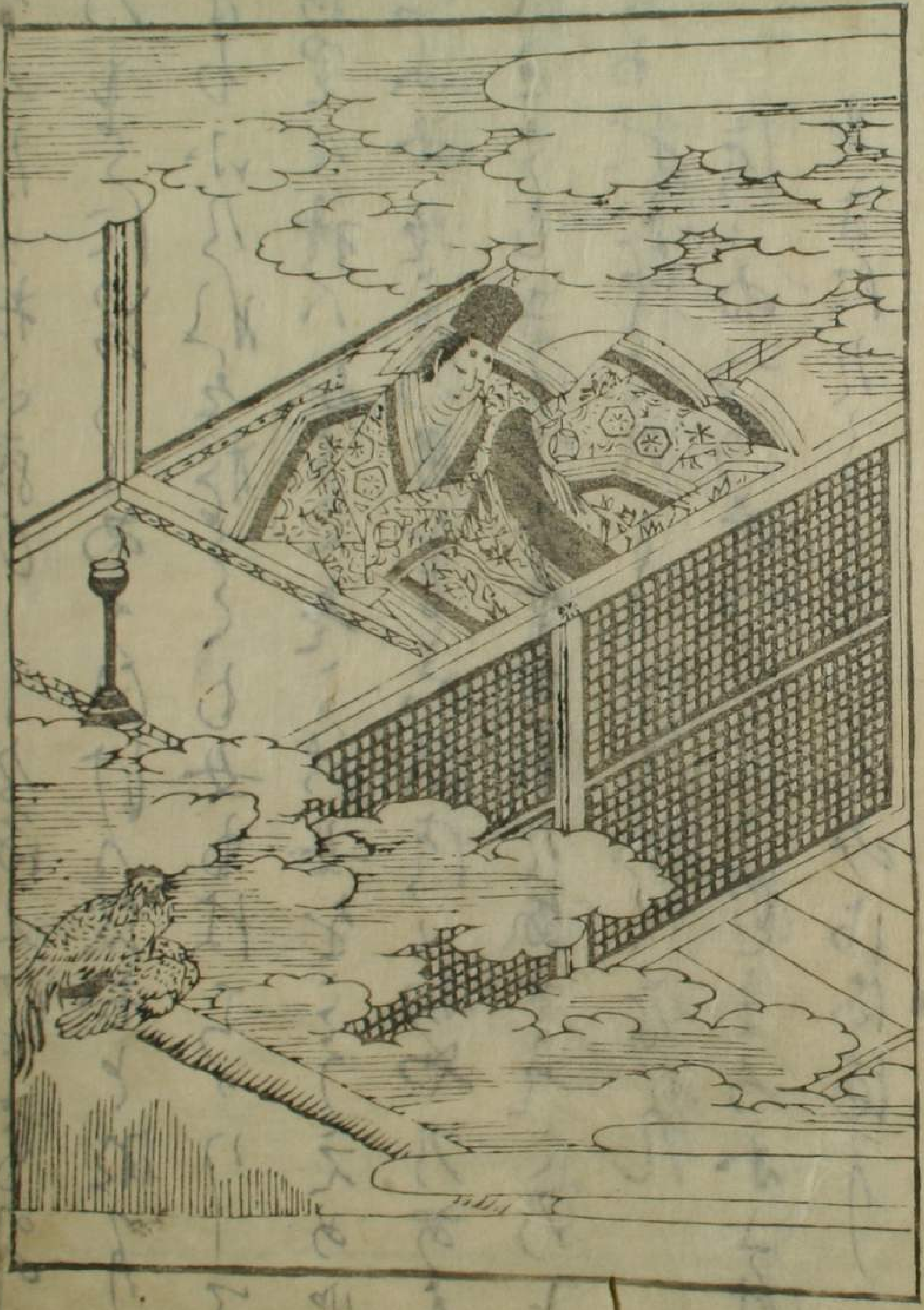
今ハとてわするゝ草のたねをたに
人の心にまかせすも哉

返し

わすれくさうふとたにきく物ならハ
おもひけりとはしりもしなまし

又々ありしよりけにいひかはして男

わすらんと思ふ心のうたかひ有
ありしよりけに物そかなしき
返し
なか空に立ゐる雲のあともなく
身のはかなくもなりにけるかな
とはいひけれどおのか世々になりに
けれはうとくなりにけり
昔はかなくてたえにける中なをや
わすれさりけん女のもとより
うきなから人をはえしもわすれねは
かつうらみつゝなをそこひしき
といへりけれはされはよといひておとこ
あひ見ては心ひとつをかはしまの
水のなかれてたえしとそ思ふ
とはいひけれとその夜いにけり
いにしへゆくさきの事ともなといひて
秋の夜の千夜を一夜になすらへて
やちよしねはやあくときのあらん



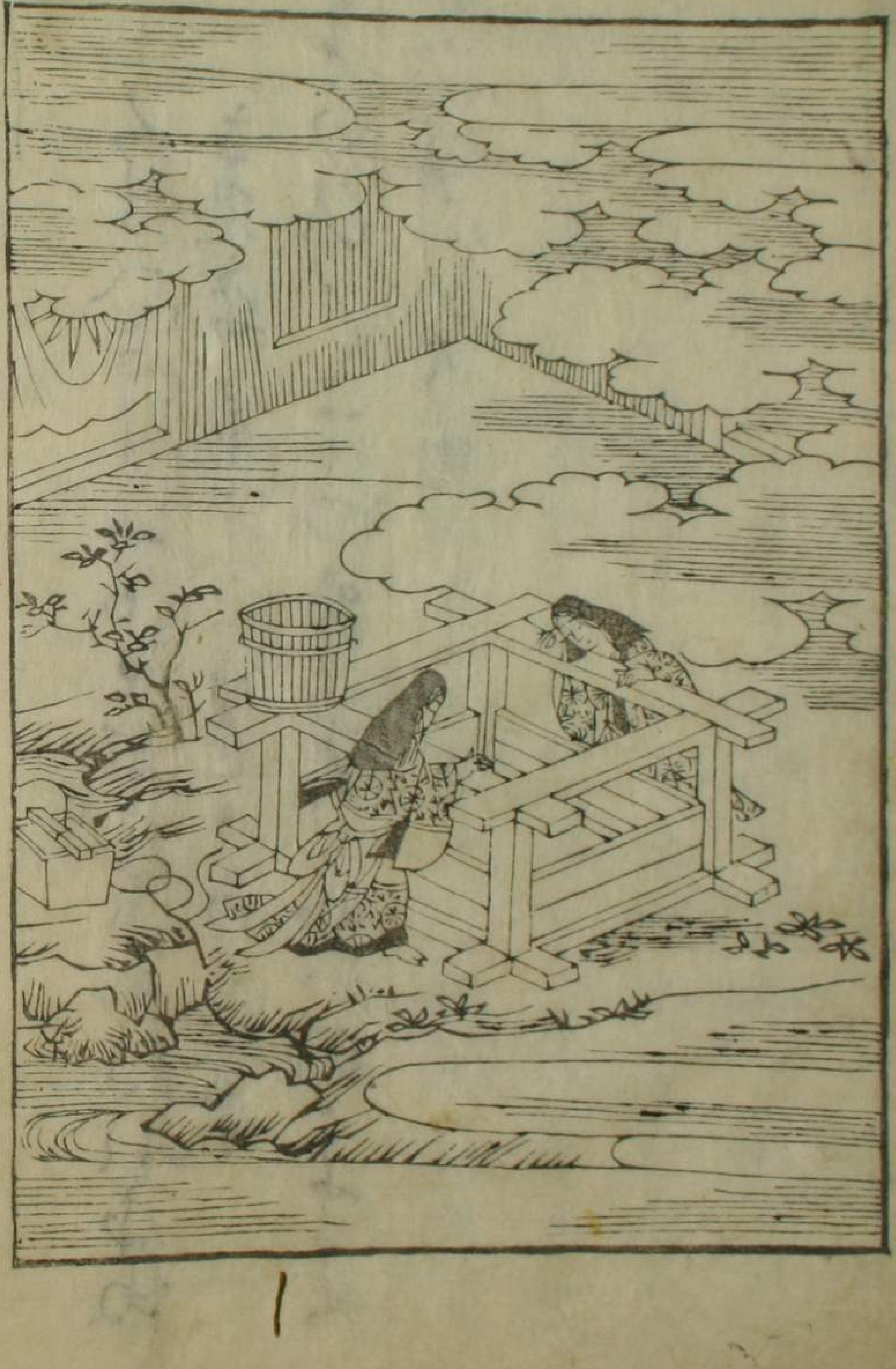
みし

なよはよのちぎを一夜にねせわかも
ことゝへかてよわたなよなむ
いろみしへたわもめぐらしてなん
かよひ路を

昔なまわるき庭ひしく人のこともみ
のもとにいそしくあつかひけるおとこあり
なかのよからぬにやおもはらからありて
おやこの神八おほくしおこ女をこうえあ心
思ふ女まことの男をもちひ侍しおやの方
はかなきとしきりてたかせあかりの事さんこそのと
なかれおもしろきもはかくなん
侍ぬるつのみつにうけしまろかさけ
せきにれしないもみ侍侍侍り

ころへこうしかわさけるもかこにあね
きえなきをして言のあくへ来
なとひくてつみ有かいのこそし
給ひ有りぬる

さて年ころふるほとに女おやなくた
よりなくなるまゝにもろともにいふかひ
なくてあらんやはとてかうちのくにたか
やすのこほりにいきかよふ所いてき
にけりさりけれとこのもとの女あしと思
へるけしきもなくていたしやりけれは
男こと心ありてかゝるにやあらむとおもひ
うたかひてせんさいのなかにかくれ
ゐてかうちへいぬるかほにてみれは

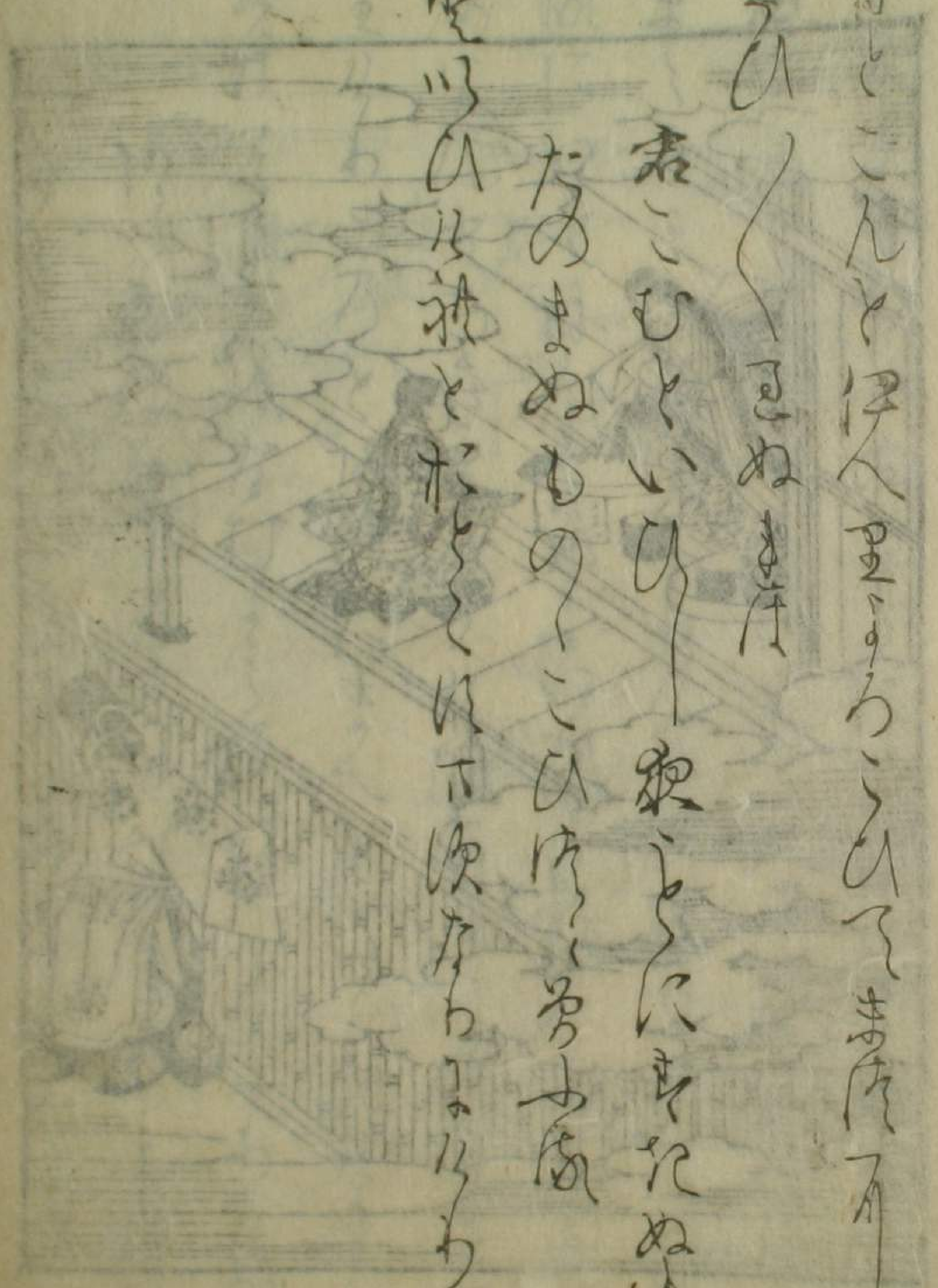


女いてくまうれはうしんけうらふかゝえて
風のあれにおよ流しなきたらぬ山
秋まつやきこりのわこゆゑん
せまゑんの乱戯ありてうきかはくかなしと
なれひてかうらへもいつのとなかつけわ

まれ〳〵かのたかやすにきて見れハはし
めこそこゝろにくゝもつくりけれいまはうち
とけて手つからいひかひとりてけ
このうつは物にもりけるを見て心う
かりていかすなりにけりさりけれハかの
女やまとのかたを見やりて

きみかあたり見つゝをおらん伊駒山
くもなかくしそ雨はふるとも

といひて見いたすにからうしてやまと
人こんといへりよろこひてまつにたひ
〳〵すきぬれは



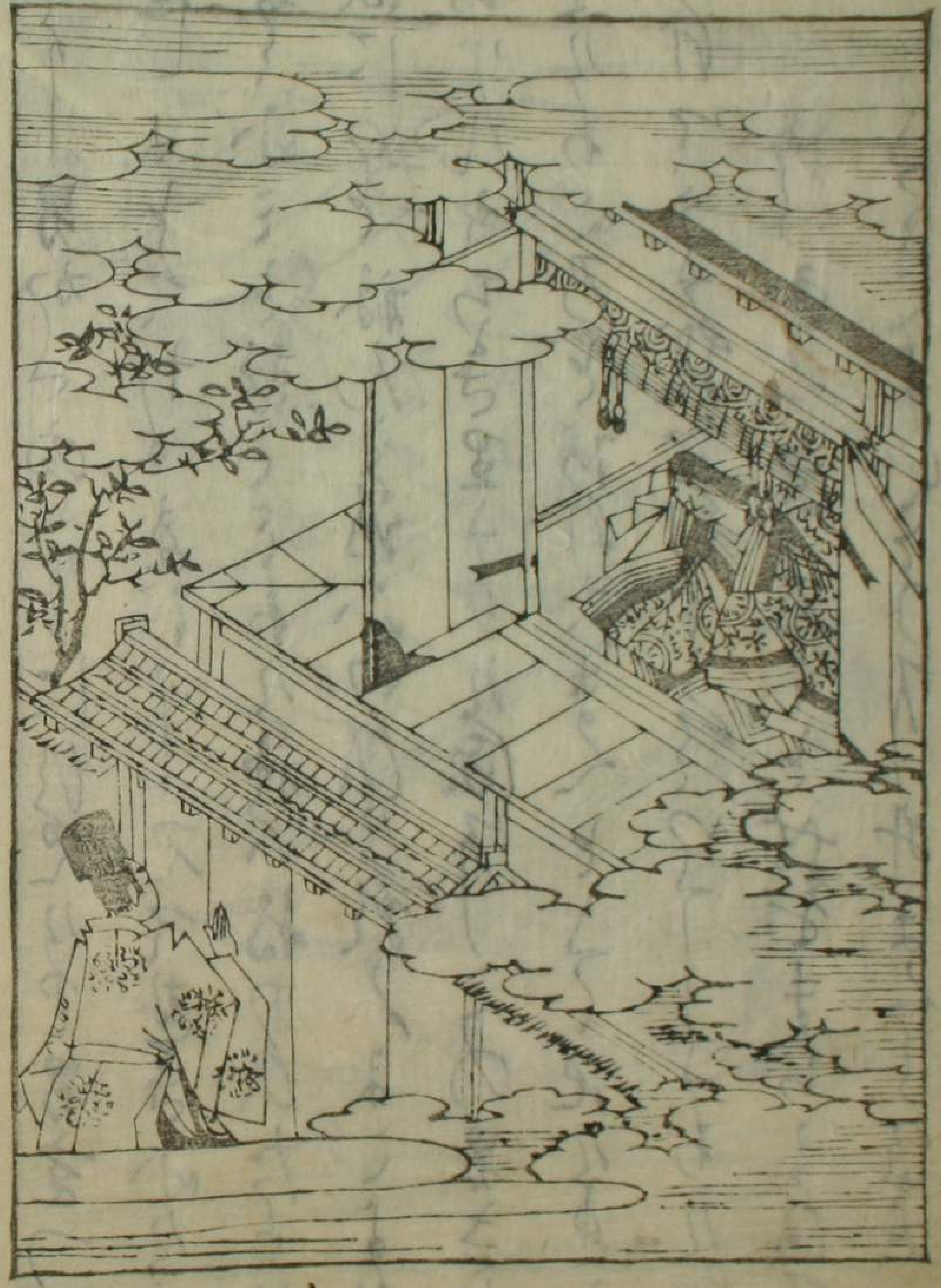
君こむといひし夜ことにすきぬれハ
たのまぬものゝこひつゝそふる

といひけれとおとこすますなりにけり

昔し男かたゐなかにすみけり男宮つかへしにとて別れおしみてゆきにけるまゝに三とせこざりければまちわびたりけるにいとねむごろにいひける人にこよひあはんとちぎりたりけるに此男きたりけり此戸あけたまへとたゝきけれどあけで歌をなんよみていだしたりける

あらたまの年の三とせをまちわびて
たゞこよひこそにゐまくらすれ

といひけりたのみの秋
おほさきまゆこに逢見んとしをへて
かのをとしのことゝなりにけりこせよ
はりひていなんかしの神ハ女
あはさをうらひれとひのゝみとむかしこらわ
こゝろいきに有ねあろし物ぬ
といひなきとおもふかわふれわめいりて
かなしくてし里まさちそをひゆけと
えならひ侍りて志水渋あ蔵不あし



りそこなりけるいはにおよひのちして
かきつけゝる哥
あひおもはてかれぬる人をとゝめかね
わか身ハ今そきえはてぬめる
とかきてそこにいたつらになりにけり
昔おとこあはしともいはさり
けるをんなのさすかなりけるかもとに
いひやりける哥
秋の野にさゝわけしあさの袖よりも

あはてぬるよそひちまさりける
いろこのみなる女返し
みるめなき我身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆくくる
昔男五条わたりなりける女をえゝす
なりにけることゝわひたりける人の返ことに
おもほえす袖にみなとのさはくかな
もろこし舟のよりしはかりに
昔おとこ女のもとにひと夜いきてまたもい

かれなかりく枕は女のてあう始所有
ねあれ拔うらやりて大殿は濃うけ小見え
さうあ影をえつかう
わきりつわ拙思ふ人いまさもあらい
やおもへ君永の志さるもあらなかわ
たよむをこはわかるたとたちきて
ミゆくち小系やえゆうせかはつらへ
如乃しーたにそもろこ志有しなく

昔いろごのみなりける女いでていにければ
などてかくあふごかたみになりにけん
水もらさじとむすびしものを

むかし春宮の女御の御かたの花の賀に
めしあづけられたりけり
花にあかぬなげきはいつもせしかども
けふのこよひににる時はなし

着にはころもかなわけは女乃もと有
おふすりにたま乃をつかはしもみして
てきゝ給のなかく見證ゝ給
せもし宮乃うちにて男ゝゝちの詩歌
乃まん塚本わたかのなり乃あさにか
はもひくんよしやさしよさ乃んさ
見むといふはとく
侍こもなき人をうけへはわれ乃説くを
を乃らうへありすはふといふなり

といふをねたむゆゑ家わ
せうし拙いひ乃給ぬにもしこ給はわてく
いまへのこつ跡をたまさくわ逢ふ
むかし塚四季一月あれよりも郎
いつはり説となふかまも思ひやすくなせ
せもし男つ乃そむかしのこあわにかよ
ひくり女このさひいかなるしとお
もへ給くしよ方はにはとく
おしへこゝわこ地くすき儒の道に

まてこ有うら清をいなもひまれとう秋く
見し
こもか江有り思ふところをいそかた
おもはさほおもしてし世の余り
升かすの人の源とりしてハよしや行し座
世の中にとこ清きにかわ風人の家もとに
いへハえ云いえ旅は世ねささハきまて
心をと清有りまけくこ清き郎
松もいれんは伊人すいすの庵し

肴心まもおふてたえ家人のもとに
玉乃をしあえ拙まよあてむけへまん
たえてのいちもおきんとう思ふ
世のしまはきおるふめわかとひとし
ろの女代もいへ有り
容せは君こねまそけへるたきよう候う
あえせと人すかのかもはなくに
着にわたへい清このこなわけのおよあつか
家わ家のし清めたくやおもひれん

我なくてこひもとくふかきしらほの
ゆふうけはさぬ袖の人あはとも

返し

女かゝさて我は恋ひも[illegible]ねらわしく
あひ見てのきハとのしとうさふ
せめし紀[illegible]あわつゆりゆきふ[illegible]にけ
身をうくさ[illegible]所よりてやり[illegible]
あよりか思ひあらひぬ世の中ハ
人ごとこと[illegible]ひとつかし[illegible]

返し

ふるき[illegible]い世の人ことわりなくかきかも
こひとをいはんとくゝひし[illegible]こも
菩[illegible]院乃君うれしや見れとおけ
まのしみゆうみかとの[illegible]こゝろのいふき
やすゆきうかありうみこゝ[illegible]
[illegible]はんは[illegible]の[illegible]のとなりあ[illegible]
けりけとく[illegible]見んと女車より
かひみてうそく[illegible]りゆとめ[illegible]

みていてたてまつらすうち泣てやみ
ぬへかりける間に天の下の
色好み源の至といふ人これも物
見るに此車を女車と見てよりきて
とかくなまめくあひたにかの至蛍
をとりて女のくるまに入たりける
を車なりける人此蛍のともす
火にや見ゆらんともしけちなんする
とて乗れる男のよめる

いてゝいなはかきりなるへみともしけち
年へぬるかと泣こゑをきけ
かの至かへし
いとあはれ泣そきこゆるともしけち
きゆる物ともわれはしらすな
あめの下の色好のうたにてはなほそ
ありける至は順かおほちなりみこ
の本意なし

音わの文をとこえしすハまぬめ誠
たまひふわさしきにおやあわて思ひ
もう浮くとて彦女をほかへまひ座ん
とひさこう伊人彦をいやられはやこ
あれハ彦さん心きたひなかわみれやく
むかいち妃たひまをんふもいやし
み神ハれまふちう御しきるおひた有
たまひ候いやまき里ま海かふうにお
やこの女をしひう候たとくち此縁をなす

せともとくむかよしましみえいえくくいね
おとくなくくよあ候
いそくいなん吉道の別挑候かしこのしん
あわしふまゐれみたかあしも
此まかえたしいわ有にわりおやあまてに
にわなをたもひてこういひししいと
わくきもいうしとたまあまきむきちり
たえいり有にくみ神ハまとひて私たへにわ
をみのいわあひりくわまたえいをてみの

日比いぬのとほりわたになせうつして
いきほひたかりし昔しのわか人はさら
すゞしき時にむかしをなつかしみつまのた
きなきはさすがふかん成
昔し女はらからふたりありけりひとりは
いやしきおとこのまづしきひとりは
あてなる男もたりけりいやしき男もた
るしはすのつごもりにうへのきぬをあ
らひてゝづからはりけり心ざしはいたし

りけれとさるいやしきわざもならはさり
けれはうへのきぬのかたをはりやりてけ
りせんかたもなくてたゞなきになきけ
りこれをかのあてなる男きゝていと心ぐ
るしかりけれはいときよらなるろう
さうのうへのきぬを見いでてやるとて
むらさきのいろこき時はめもはるに
野なるくさ木ぞわかれざりける
むさし野の心なるべし

宥おやゝいつはゝのこゝしほく女説
ゆひ伊人里乃わさまとにくしまたおしき
里悉ゆ志えくいつさけ遣とあをいゆしう
しろぬたくさわとていゆてはたえあめまの
志うわけわ郡いたし行らさわ乃数陣
なわ乃耕いふつか三ほりのわ怖り原こと
ありてえ伊めてうくな龍
いそこうあえるよい書さゆいし志き
たかかえふちといふはいかならん

もろうたおはしさ有りよ思かなわろかり
むかしやの見ことゝすみくにゝし
南しるわうおみこ女数は志めしく
ゆとりしこくめくこ佐かうねひく数
ま人なるめきそあり思多数わき乃こと
たまひく数をみひとあへつけてゆ見る
まとこあれのかこを本まて
朝出なゝなくきとの御ま守、
事をうとまきぬおもつとのう

よこいつかこの女くし、数とわて、
又乃こたらしてのさむくけきうかう
いなわあ南さむうとままぬさは
時先さ有よなむ御わく依本とくぬし
ゆかるを本ほ道てのたなくふをき乃む
かのはむきとにこ忠しきえすい
むしあうた人へり世きの外え本き
けせんとそおひてうとき人ましあしさわ
ルまハいのとうしさる有七くえて女

のほうくかはんといひけるかたとへ
さるよみてもわすこし遊ひつけさせ
いそくゆく男のた兄にとぬた清きハ
わさへもなくたわぬ家の都
こた哥ハ何かなる所おもひ給ふ神ハ
心とめてよまれは庭にちりひて
女の男女わなり人麿女ひめのしれく
いそくおとこふかきいてんとおもひ
宗かうちいそくせいとかくさやありけん

一

その尾こそなかてしぬへたと弟にか
くこうおもひ志かそひの歎きをおやまさ
つけてなく〳〵清けなれ神ハきよひ
きたわれまとと志所 清神くやし
こもあるなわときにこ所月のつこもあ
いと女清きこゆるひによろハまするひそわ
て涙あれて尾こすし きの風ふきさそのか
ほたかなうくとひあうりこみおととも
せつかてし

ゆくほたる雲の上まていぬへくハ
秋かせふくとかりにつけこせ
くれかたき夏のひくらしなかむれハ
そのことゝなくものそかなしき

むかし男いとうるはしきともありけりか
た時さらずあひおもひけるを人のくにへ
いきけるをいとあはれとおもひてわかれに
けり月日へておこせたるふみに
あさましくえたいめんせで月日のへにけ
ることわすれやしたまひにけんといたく思ひ
わびてなんはべる世中乃人の心はめかるれば
わすれぬべき物にこそあめれといへ
りければよみてやる

めかるともおもほえなくにわすらるゝ
ときしなければおもかげにたつ

むかしおとこねんころにいかでと思ふ女
ありけりされどこの男をあだなりときゝ
てつれなさ乃みまさりつゝいへる
おほぬさのひくてあまたになりぬれば
おもへどえこそたのまざりけれ
返し　おとこ
おほぬさとなにこそたてれながれても

津井かこうせいはわとのみかたを
有おとこさくのむすめにりちぎせんとて
人をまち久敷ありしかけ久ぞの
いまうし悦くる点花梅と人まこ記
さと銭いこの達源と梅直かわるわ

かしく